

# マイナーなスポーツをあつかった 児童文学に描かれた子どもの姿

細谷建治

\*メジャーとマイナー

「マイナーなスポーツをあつかった児童文学に描かれた子どもの姿」について考える。これが、今回、ぼくに与えられたテーマになる。

最初に、マイナーなスポーツとは何かを、決めておく。メジャー＝多数、マイナー＝少数ということからいくと、そのスポーツの競技人口ということになるのだろうか、ここでは、もっと大雑把に考えることにする。

少し前まで、メジャーなスポーツといえば、野球ばかりであった。子どもの本も、古典的な佐藤紅緑『あゝ玉杯に花うけて』（講談社、一九二七年五月号）一九二八年四月号まで『少年倶楽部』連載）や、読書感想文コンクールの課題図書にもなった、砂田弘『二死満塁』（ポプラ社 一九七七年）などあげることができる。

ちよつと変わったものでは、皿海達也『野口くんの勉強べや』（偕成社 一九八一年）は、本塁と一塁がわりの電信

柱しかない〈直線ベース〉が出てくる。岡田淳『雨やどりはすべり台の下で』（偕成社 一九八三年）は、公園での〈三角ベース〉の場面から始まる。これは、先生が出した〈夏休みちゅうに、最低いちどは、グループ登校のメンバーであそぶこと〉という宿題をこなすために考えついた〈三角ベース〉である。

野球だけがメジャーなスポーツであった時代に変化が生じたのは、サッカーのプロ化（一九九三年）あたりからだろう。ワールドカップの日韓二国開催（二〇〇二年）というイベントも助けになり、今では、子どもたちのあいだでは、サッカーは野球を抜いてメジャーなスポーツになっている。

そこで、「マイナーなスポーツ」とは何かということになるのだが、ここでは、本当に大雑把に「野球とサッカー以外のスポーツ全て」ということでくくって、野球とサッカー以外のスポーツをあつかった児童文学作品に描かれた